書　評

柴田陽一　著
『帝国日本と地政学―アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践―』
清文堂　2016年3月　421頁　9,600円＋税

日本の地理学界では，地政学はアジア・太平洋戦争（1931年～1945年）や領土拡張を正当化した非科学的分野であるとみなされ，戦後長らくタブー視・異端視されてきたことは周知の事実である[1]。一部で研究が蓄積されてきたとはいえ，その全容を解明するには道半ばといえる。本書はかつて日本本国や植民地で展開された地政学について，単に戦後的な視点から一面的に評価・批判するのではなく，その同時代的な意味を思想・実践両面にわたって読み解こうとする野心作である。その営為を通じて，近代日本における地理学と帝国主義の関係を再検討することに本書の目的があり，日本の地政学史に大きな一石を投じる研究といえよう。

本書の構成は以下の通りである。

第1章　序論
【第Ⅰ部　本国における地政学の展開―「日本地政学」を例に―】
第2章　「日本地政学」の思想的確立―小牧実繁の個人史的側面に注目して―
第3章　陸軍の戦略研究における綜合地理研究会の役割
第4章　「日本地政学」と思想戦―小牧実繁のプロパガンダ活動の展開とその社会的影響―
補論1　綜合地理研究会のメンバーとその周辺の人物の略歴・著作目録
【第Ⅱ部　植民地における地政学の展開―「満洲国」を例に―】
第5章　「満洲国」における地理学者とその活動の特徴
第6章　建国大学の宮川善造と「満洲の地政学」
第7章　満鉄調査部の増田忠雄と地政学―「文化圏」研究と地政学への思想的展開―
第8章　結論
補論2　本書で取り上げた地理学者たちの戦後
補論3　戦前の欧米諸国および日本における地政学の動向

それでは各章の概要について若干の私見を交えながら紹介し，最後に本書全体を通じての意見・感想を記すこととしたい。

第1章序論では，欧米諸国の地政学や「帝国日本」の地政学に対する先行研究を整理し，その上で本書の視角や課題などを述べている。著者は地政学を，「政治のみに走った地理学の『異端児』として学史から排除されねばならぬようなものでは決してなく，地理学が潜在的に帯びる政治性の中から生まれてきたもの」であり，「地理学史の研究上避けて通ることの許されぬ問題」と位置付けており，地政学史を地理学史の一環としてとらえる姿勢を明確に示している。その上で先行研究の問題点として，これまで思想的な側面のみが強調され，その社会的実践に関する検討はなされてこなかったこと，さらに「満州国」などの植民地やその候補地に関する地政学的理解についての注意が不十分であったこと，の2点を指摘している。裏を返せば，この2点の克服が本書の課題となる。この課題に取り組むにあたり，著者は公刊資料のみならず書簡や日記，極秘扱いの内部資料，関係者への聞き取りなど，多様な史資料を徹底的に活用する姿勢を示す。著者が指摘するまでもなく，言論統制が敷かれていた当時において公刊資料は必ずしも実態を反映していないことが理由であり，必要不可欠な手法といえよう。

第Ⅰ部には第2章から第4章が含まれ，日本本国における地政学の展開を取り上げている。

まず第2章では，「日本地政学」の主唱者であった京都帝国大学教授・小牧実繁に注目し，その言説を踏まえた個人史的研究を行っている。小牧は1937年頃から地政学を主張しはじめるが，その背景には，実践性を失った当時の景観地理学などに対する反発があり，何とかして地理学の実践性を取り戻し，その地位を向上させたいという思いがあったという。小牧が目指したのは，まさに帝国主義と戦争を支える実践的地理学としての地政学であったが，日本の絶対性を確信し過ぎるあ

まり，日本の行為を相対化する視点がなかったと著者は指摘する。その地政学は同時代において一定の支持を得た反面，皇道精神を重視し過ぎた「神がかり」との批判を受けていたという。小牧の地政学は終戦とともに「帝国日本」と「心中」する形となり，「戦後，地理学研究における主体性の議論を忌避させた原因の一つになった」との著者の指摘は，傾聴に値する。

第3章では，小牧ら京都帝大地理学教室関係者で構成された綜合地理研究会について，関係者の日記や回想録，インタビューを含む様々な史資料を踏まえて考察している。同研究会が正式に発足したのは1939年であるが，陸軍参謀本部の高嶋辰彦大佐からの依頼が契機であり，高嶋が設立した皇戦会などから資金提供を受けていたという。著者は，同研究会が陸軍の戦略研究の一端を担うと同時に，教育・啓蒙的なプロパガンダ活動を展開していたことを，『高嶋日記』などに基づいて明らかにした。なお本章は，初出論文[2]から大幅に修正されたものとなっている。当初著者は，同研究会と陸軍との関係を直接的なものとみなし，陸軍の作戦計画に大きく貢献していたと結論付けていたが，その後外邦図研究グループの小林茂・鳴海邦匡による批判[3]を踏まえ，本書収録時には，陸軍との関係は主に高嶋という個人により維持された間接的なものであり，いわば民間シンクタンク的な存在であったとした。批判に対して真摯かつ真剣に対応しようとする著者の姿勢が垣間見られて，評者として共感を抱く。

第4章「『日本地政学』と思想戦」では，小牧実繁のプロパガンダ活動の内容とその社会的影響力を論じた。小牧の地政学がメディアから注目を集めたのは1940年刊行の『日本地政学宣言』であり，さらに大日本言論報告会などからの組織的・制度的な保護を受ける形でプロパガンダ活動が華々しく展開されていったとする。一連の活動の結果，学界における地理学の地位向上が図られたとする著者の指摘は，「日本地政学」の同時代的な意味を明らかにするものとして重要である。しかし小牧が主張したのは，日本の優越性や絶対性に基づく一元的世界観であり，特に「世界はアジアなのだ」とする極端な地政学的世界観は国内外で奇異なものに映り，実質的には必ずしも大きな啓蒙効果を発揮したとは言えなかったと結論している。

補論1では，綜合地理研究会メンバーとその周辺人物に関する略歴と当時の全著作目録を，岡田俊裕の『地理学者の戦時期著作目録』[4]やその他関係資料を渉猟して提示しており，その資料的価値は高い。特に小牧の著作目録は，著者自身が発掘した小牧自筆資料に基づくものだけに重要である。

続く第Ⅱ部に含まれる第5章から第7章では，植民地，特に「満州国」における地政学の展開を取り上げている。

第5章では，「満州国」で活動した地理学者の多くが，「満州国」国務院と南満州鉄道株式会社（満鉄）という2つの系統に所属していたと指摘する。前者の系統の地理学者は「満州国」の国土計画という国策と一体化した活動を展開し，後者の系統の地理学者はその専門分野を生かし，会社の方針に沿った調査研究活動を展開していたと論じた。しかしいずれの系統についてもその調査研究は各機関の方針に従う形でしか遂行できなかったという。これらの地理学者の採用は，出身大学の指導教官や同窓生の推薦・紹介により行われる傾向にあり，特に京都帝大卒業者に顕著であったとしている。次章以降で取り上げる宮川善造，増田忠雄も京大卒であり，その文脈で採用されたようである。「満州国」において京大出身者が地政学の中心的担い手となった背景がよく理解できて興味深い。

第6章においては，「満州国」国務院系統の高等教育機関である建国大学に焦点を当て，その教授であった宮川善造を取り上げている。宮川は国務院総務庁といった行政機関と連携して「満州国」の国土計画に関与し，その過程で地政学に関心を深めていったとする。そして建国大学という，多民族から成る大学生たちに対する地理教育に地政学の実践の場を見出していったと論じている。宮川は，「皇道」を理念とする小牧の地政学を「科学的貧困」に陥っていると批判し，独自の「満州の地政学」を提唱して本国との差異化を目指したが，その主張は本国側の論理とさほど変わらないものであり，特に中国人学生からは反発を招いたという。なお，著者はここでも，同大学の一次資料を活用することに加え，同窓会総会に出席して卒業生数人にインタビューを実施する徹底

ぶりを示している。

第7章では，満鉄系統に属する地理学者・増田忠雄を取り上げ，社外秘の報告書や内部文書の一次資料も踏まえてその活動実態を浮き彫りにした。増田は渡満前に文化圏の歴史地理的研究に取り組んでいたが，渡満後は国境研究へと移行し，地政学的研究へと関心を深めていったという。増田にとって地政学とは実践性を有する地理学であり，「大東亜共栄圏」を「科学的」に把握する地理学でもあったが，この点，小牧や宮川と通じるものがあったとしている。なお，この増田忠雄は，今日では忘れ去られた地理学者といっても過言ではなく，この人物を「発掘」した意義は大きいと評者は考える。

第8章結論では，本研究を通じて得られた知見や成果，その意義，今後の課題をまとめている。著者は本書の成果と意義を，第一に，学問的思想と社会的実践の両面に着目することで，地理学者の社会的存在としての意味や価値を問う地理学史，すなわち「地理学の社会史」を提示できたことにあるとする。いいかえれば，社会との関わりという観点から近代地理学を捉え直す重要性を提示したことだと述べる。地政学が「地理学史上の一特殊例として片付けられるものでは決してない」とする著者の指摘は重要である。第二は，本国と植民地双方に着目したことで，欧米諸国の先行研究になかった「植民地地政学」というべき新たな視座を提示したことであるとする。その上で，今後の課題としては，帝国日本と欧米諸国の地政学の比較，「満州国」以外の植民地における地理学者の活動などの究明だと記している。

補論2では，本書で取り上げられた地理学者たちの戦後の状況を簡単に確認している。戦後まもなく小牧実繁は公職追放を受け，小牧とともに「日本地政学」を推進した京都帝大地理学教室講師の室賀信夫，同助手の野間三郎も小牧の後を追って辞表を提出したが，教室を支えた3人のスタッフが総辞職したことで，教室は存続の危機に陥ったとしている。地政学が大きな傷として残ったことで，1990年代までその活動実態が語られることはなかったという。しかし綜合地理研究会のメンバーのうち，小牧を含む少なくとも4人が戦後，自らの地政学に「自信」を表明していたことに評者として新鮮な驚きを感じた。一方，満州にいた宮川善造は戦後2年間ソ連で抑留生活をおくったのち帰国，増田忠雄は戦後に捕虜部隊の一員としてソ連に連行され，同地で客死したという。

補論3は筆者の講演録である。本論で詳述できなかった戦前の欧米諸国や日本における地政学について詳しく言及している。話し言葉ならではの分かりやすさがあり，本書全体の理解促進につながると同時に，著者の地政学史研究に対する見方が窺えて有用である。

以上，本書の概要を簡単に紹介してきた。本書の最大の意義は，これまでタブー視・異端視される傾向にあった「帝国日本」の地政学を，近代日本地理学史の一環として本格的に位置付けたことにあると評者は考える。当時の地理学者が地政学に注目した背景には，地理学を「帝国日本」の国策を支えるような実践的科学にしたいとの強い思いがあった。著者が指摘するように，まさに地政学は「近代の地理学が目指した社会的な実践の一形態」であったのである。この点は本国と「満州国」との研究環境の違いはあれ，共通する志向であったといってよい。地政学が帝国主義に加担したことは許容できないが，推進者たちに地理学の地位や社会的有用性を向上させたいとの意図があった点は事実である。同じく地理学史を専門とする評者から見ても，著者が地政学史を地理学史の中にしっかり組み込み，「地理学の社会史」という新たな視点を提示したのは大きな意義があると述べておきたい。

加えて本書の意義は，これまで注目されなかった地理学者に関する個人史的研究を試みたことである。本書の中心人物である小牧ですら，個人史的な研究はこれまで歴史地理学者としての小牧に着目した足利健亮の研究[5]のみという状況であった。宮川善造，増田忠雄については，まとまった個人史的研究は皆無に近い状況であった[6]。近代地理学史の欠を補う意味においても重要な成果である。特に植民地における地理学者の個人史的研究は蓄積が少ないだけに貴重であろう。

また本書では，「植民地地政学」という新たな視点が提示されている。著者は，この視点は先行研究にも類例がないと指摘する。評者はその学史的意義について十分語れるだけの知見を持ち合わ

せないため詳細は割愛するが，わが国における旧植民地研究にとっても有益な研究であると推測する。

一方，課題も存在する。本書で描かれた「帝国日本」の地政学は，著者自身も認識しているように，当時の地理学者による地政学の全てではない。特に評者として指摘したいのが，東京在住の地理学者を中心に設立された「日本地政学協会」の動向[7]がほとんど取り上げられていない点である。著者柴田陽一氏は京都大学大学院文学研究科地理学教室で学び，その学界デビュー作は京都帝大教授であった小牧実繁の書誌的研究[8]であった。このような著者のバックグラウンドを考えると，本書が京大関係者を中心とする地政学研究となった理由がよく理解できる。すでに見たように綜合地理研究会は京大地理学教室の関係者で構成され，宮川善造や増田忠雄も京大出身者であった。その意味で本書は，百年以上に及ぶ京大地理学教室史の一齣でもある。著者が今後まとめたいとしている『続・帝国日本と地政学』には，ぜひもう一つの中心であった東京のグループの動向なども取り上げ，「帝国日本」の地政学史の全容に迫っていただきたいと期待する。

近年，小林　茂ら大阪大学人文地理学教室も日本の地政学の組織と活動に関する歴史的研究を進めてきており，大きな成果を得ている[9]。本書の刊行を契機として，戦時期の地政学に関する研究が一層進展するとともに，この領域に対する社会の関心の喚起を願う次第である。

（川合一郎）

〔注〕

1）高木彰彦「大戦期日本の地政学」（人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版，2013），80-81頁など。

2）柴田陽一「アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割―綜合地理研究会と陸軍参謀本部―」歴史地理学49-5，2007，1-31頁。

3）小林　茂・鳴海邦匡「綜合地理研究会と皇戦会―柴田陽一「アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割」の批判的検討―」歴史地理学50-4，2008，30-47頁。

4）岡田俊裕『地理学者の戦時期著作目録』和田書房，2006。

5）足利健亮「小牧実繁と歴史地理学」（京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房，1982），206-216頁。

6）宮川に関する従来の研究業績は，岡田俊裕『日本地理学人物事典【近代編２】』原書房，2013，315-321頁の「宮川善造」の項目に限られるといっても過言ではない。なお，同書に増田は取り上げられていない。

7）岡田俊裕『地理学史　人物と論争』古今書院，2002，97-105頁。

8）柴田陽一「小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向」歴史地理学47-2，2005，42-63頁。

9）例えば，渡辺正氏所蔵資料編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部―渡辺正氏所蔵資料集―』大阪大学文学研究科人文地理学教室，2005，小林　茂・鳴海邦匡・波江彰彦編『日本地政学の組織と活動―綜合地理研究会と皇戦会―』大阪大学文学研究科人文地理学教室，2010。